

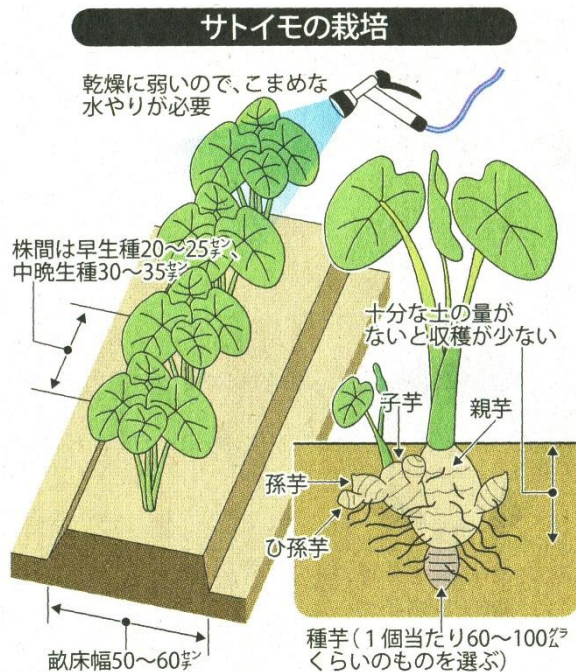
サトイモ

夏場の乾燥に注意

——藤崎 成博

サトイモは、山に自生するヤマノイモ（自然薯・ジネンジョ）に対し、里で栽培されることからこの名がついたといわれています。インド東部からインドシナ半島が原産で、日本への渡来は稲作縄文時代後期より古いとされています。

独特のぬめりは「ムチン」や「ガラクトン」「マンナン」という成分で、タンパク質の消化・吸収を高めて胃腸の働きを活性化させ、潰瘍の予防に役立ち、常食していれば肝臓や腎臓の弱りを防止し、老化防止にも役立つといわれています。血中コレステロールの抑制や糖尿病予防、便通をよくするともいわれます。



サトイモは出芽後、種芋の上に新しい親芋ができ、その周りに子芋、さらに孫芋、ひ孫芋と一つの種芋からたくさんの芋ができます。ねっとりとした子芋用品種（子芋と孫芋が食用）には早生種の「石川早生」、中生種の「土垂」「蓮葉芋」、ほっくりとした親子兼用種に晩生種の「大吉」等に分けられます

生育温度は25～30度で高温多湿を好み、夏の暑さでもよく育ちますが、乾燥に弱く、干ばつの年には不作で品質も悪くなります。特に夏の乾燥に弱いのでこまめな水やりが必要です。また、**連作はイモが腐りやすくなります。前作から3、4年間は別の野菜を植えて輪作をしましょう。**

種芋は60～100g（1個当たり）くらいのもを選びます。植え付けは3月下旬～4月で、植え付ける2週間前に1平方メートル当たり苦土石灰100g、堆肥3kgを、1週間前に化成肥

料100g（チッ素、リン酸、カリ成分15%の場合）を入れて耕します。畝床幅は50～60cm、株間は早生系が20～25cm、中晩生系は30～35cmとします。

マルチ栽培は、溝を掘り種芋の芽を上にして並べます。芽から15cmくらい土をかぶせて畝を作り、黒色ポリマルチフィルムをかぶせます。マルチで雑草の発生を抑えるので、途中で土寄せの必要がありません。

芽がマルチを突き上げてきたら、その部分を切って芽を外に出します。無マルチ栽培は5cmくらい土をかけて植えます。出芽後、葉が2、3枚になったら適宜土寄せをします。乾燥をきらうので夏場は、枯れ草やわらなどで畝を覆います。梅雨明け後はマルチ栽培、無マルチ栽培もたっぷりと水を与えましょう。

収穫は早生種が8月上旬～9月上旬中生種は9月上旬から。晩生種は10月から翌年の春先まで収穫が可能です。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室研究専門員）

平成27年3月12日（木）／南日本新聞